



全国市町村国際文化研修所
学長 植松 浩二

30周年を迎える新年にあたり

明けましておめでとうございます。

皆様には、日頃より全国市町村国際文化研修所（JIAM）の運営につき、ご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。お陰様で、JIAMも平成5年4月の開講以来、今春で30周年を迎えることとなります。また、受講頂いた方は、昨年夏に累計で11万人を超えるに至っています。

この間、時代の変化に伴うニーズに対応して、当初主流であった語学研修を含む長期（3か月、1か月）の研修を見直し、市町村においてニーズの高い一般行政に係る研修を大幅に拡充するとともに、多文化共生分野の研修も積極的に実施するなど、時代と社会の要請に応えるべく努力を重ねてきました。その結果、平成25年度以降、毎年100本以上の研修を実施し、6,000人を超える受講者の方々に集っていただける施設となりました。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、令和2～3年度は、3本の海外研修を含め、計画していた研修の半数近くを中止し、受講者数も2,000人前後と大幅に減少することとなりました。もちろん、WEB会議システムを活用するなど、研修機会の提供にできる限り努めはしましたが。

令和4年度においては、依然としてコロナ禍のもとではありますが、海外研修を含め、ほぼすべての研修について、感染防止対策をしっかりと講じながら、本来の姿であるJIAMでの宿泊を伴う集合研修により実施しています。コロナ禍を経て得られたオンラインの活用による研修手法を織り込みつつも、リアルな環境で「共に学ぶ」ことにより研修効果は高まるとの思いを新たにしています。

さて、令和5年は、どんな年になるでしょうか？予断を許さない国際情勢が継続する中、新型コロナウイルスはこれからも変異を繰り返しつつ、私たちの生活に影響を及ぼし続けるでしょう。また、デジタル化の波は否応なしに押し寄せ、グリーン化の流れも加速するものと見込まれます。加えて「誰一人取り残さない」となると、行政が越えるべき山は険しくなるばかり…。

課題山積とは思われますが、だからこそ、誰もが笑顔で暮らせる社会の実現を信じて努力を重ねてゆく人材が求められます。“人は想像した通りの人になる”とさる書物にありました。JIAMでは、そのような人材の育成に向けて少しでもお役に立てるよう、30周年を迎える節目の年に改めて自らの役割を見つめ直し、志を同じくする仲間と共に学べる質の高い研修の提供に一層精励してまいります。

本年もどうぞよろしく申し上げます。